メータオ・クリニック支援の会（ＪＡＭ）
会報メール　第 115 号
〔2019 年 8 月発行号〕

ＮＰＯ法人メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。
JAM 会報メール第 115 号をお送りします。

JAM は 2008 年 3 月に発足された NGO です。ビルマ／ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へ JAM の最新の活動を２カ月に一度、会報メールにて発信いたします。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

＜目次＞　　〔ページ〕

グローバルフェスタ 2019 のお知らせ

国境の医療者　全国の書店で絶賛発売中！

国内から

国際保健医療のなかで

編集後記

次号の予定

グローバルフェスタ JAPAN 2019 のお知らせ

「グローバルフェスタ JAPAN 2019」に出展します！

今年 JAM はお台場センタープロムナードで開催される　http://www.gfjapan2019.jp/
「グローバルフェスタ JAPAN 2019」に出展が決定しました。

グローバルフェスタへの出展は２年ぶりとなりますが、活動報告コーナーにも参加しますのでみなさまとメータオ・クリニックや国境の現状を共有できる時間になりますと幸いです。
歴代現地派遣員や日本事務局での活動紹介のほか、現地でしか手に入らないメータオ・クリニックオリジナル T シャツや民芸品などの販売を行っておりますのでぜひ気軽に足を運んでくださると幸いです♪
また、今年の４月に出版されたばかりの書籍**「国境の医療者」**の販売も併せて行う予定です！現地に寄り添い続けた 10 年間の現地派遣員と JAM の軌跡をリレーエッセイにして綴っていますのでぜひお手に取っていただけますと嬉しいです。

ぜひ皆様のお越しをスタッフ一同楽しみにしております！

【当日 JAM の出展ブースを一緒に楽しく盛り上げてくださる ボランティアさんを募集しています♪】

お時間はご希望に沿った時間帯で調整をさせていただきます。人手が足りず、現在困っています。１時間でも構いません。
具体的にお願いしたい内容は、商品の陳列、販売（店番のお手伝い）、ブースへお越しくださった方へのチラシやパンフレットの配布等です。ブースへお越しくださった方への当会の説明やご質問については、すべて当会スタッフが対応しますので JAM に関する詳しい知識がなくても問題ありません。
みなさまのご応募をお待ちしております♪

開催日時　９月 28 日（土）10:00～17:00　，９月 29 日（日）10:00～17:00
※入場無料/小雨決行

開催場所　お台場センタープロムナード　シンボルプロムナード公園　夢の広場

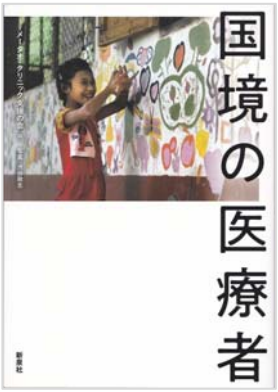
アクセス　・りんかい線「東京テレポート駅」から徒歩１分
・ゆりかもめ「青海駅」から徒歩３分、「お台場海浜公園駅」から徒歩７分

申し込み方法

会場ボランティア参加のお申し込み方法
以下の情報(1)～(6)と合わせて当会のメールアドレス support@japanmaetao.org　（グローバルフェスタ JAPAN 2019 出展担当　池村、白壁）　までお送りください。

件名「グローバルフェスタ JAPAN２０１９ボランティア申し込み」
本文：
（１）氏名（フリガナ）
（２）住所
（３）所属
（４）電話番号
（５）パソコンメールからの連絡がつくメールアドレス
（６）9 月 28 日（土)、9 月 29 日（日）で参加可能な日にちと時間

国境の医療者　全国の書店で絶賛発売中！



メータオ・クリニック支援の会(JAM)が設立 10 周年を記念して出版いたしました『国境の医療者』は、引き続き絶賛発売中です。

歴代派遣員がそれぞれ試行錯誤しながら、体当たりで経験したストーリーをリレーエッセイにしています。また、JAM に関わる様々な方から寄せ書き形式でいただいたメッセージも盛り込まれています。
写真家の渋谷敦志さんのご厚意で掲載させていただいた写真もあり、とても印象的な一冊です！

日刊ゲンダイ Web での書評をはじめ、様々なメディアで紹介していただいております。以下で一部を紹介いたします。

◎JICA 広報誌「mundi」7 月号に掲載していただきました。

人チオシ！ 本と映画の新着情報

BOOK

『国境の医療者』

タイ北西部、ミャンマー国境の町で30年にわたり貧困層の患者に無償で診療を続ける「メータオ・クリニック」。ここでは、難民や移民といった不安定な立場にある人たちも医療スタッフとして仕事に従事している。

本書は、このクリニックに国際医療ボランティアとして赴任した日本の医療従事者たち歴代7名が、10年にわたる現地での活動をリレー形式で綴ったエッセイ。彼らは生と死における不条理に戸惑い傷つきながらも、現地スタッフや患者と協働するなかで精神的な交歓を深め懸命に支援を続けた。

執筆者の多くは10代の頃に読書を通して「世界の現実」を知り、将来は国際ボランティアの世界で働く決意で医療職を目指したという。ちょっとした失敗談やほのぼのとするエピソードも多数散りばめられており、国際支援の現場を身近に感じさせてくれる内容となっている。

メータオ・クリニック支援の会 編
渋谷敦志 写真、新泉社
2052円（税込）

読者プレゼント 詳細は p.38へ

July 2019 mundi 36

新聞でも紹介していただきました。

◎ 沖縄タイムス、7 月 6 日、21 面「読書」欄（下）

◎ しんぶん赤旗、5 月 26 日（右）

国境の医療者

メータオ・クリニック支援の会　編

生と死に寄せる思いが胸を打つ

1988年、ビルマ（ミャンマー）で独裁政権に対する民主化運動が巻き起こり、若き女性医師シンシア・マウンさんも参加した。だが、軍部のクーデターにより運動は弾圧され、少数民族カレン人の彼女は身の危険を感じ、タイに逃れた。

国境地帯にはミャンマー軍に故郷を追われたカレン人などの難民キャンプがある。病気やけがに苦しむ難民が、充分な医療を受けられない状況を見たシンシア医師は、89年にタイ側の国境の町メソットで、難民のための無料診療所メータオ・クリニックを開設した。以来、国際人権・人道団体の支援を受け、難民やミャンマーからの出稼ぎ労働者などに対し無償の医療活動を続けている。

世界各国の医師・看護師なども、国際ボランティアとして関わる。日本でも2008年にメータオ・クリニック支援の会が発足し、医師・看護師の派遣、医療物資・技術支援、看護人材の育成などに取り組む。本書は、歴代の派遣員が現地の医療スタッフや患者と共有した日々の貴重な体験を、真情あふれる筆致でつづったリレーエッセーだ。

現地のスタッフは、シンシア医師を除いて正式な医療者免許を持たない。難民キャンプやミャンマーの少数民族の村などの出身者が、研修と臨床での実践を積み、診察と簡単な手術まで行う。公的な医療制度の枠外に置かれた難民、出稼ぎ労働者の命と健康のため、とらざるをえない方法だ。それはまた、苦難を強いられた人々が試行錯誤しながら、生き延びる道を自ら切り開こうとする営為である。

現地で培われたその方法を派遣員たちが尊重しながら、医療の改善を提起する姿に、国際ボランティアの要諦を見る。そして、医療設備が整う日本との落差に戸惑い、地雷で手足を失った患者に象徴される戦禍に衝撃を受けながら、国境地帯で出会った一人ひとりのかけがえのない生と死に寄せる思いの深さがこまやかに描かれ、胸を打つ。

新泉社・1900円

08年に設立、13年にＮＰＯ法人化。写真は渋谷敦志

評者　吉田敏浩　ジャーナリスト

国境の医療者

メータオ・クリニック支援の会編

話題本題

困難切り開く勇気の書

タイとミャンマーの国境に位置するメータオ・クリニックは、軍事政権による弾圧や経済的窮境から逃れた難民・移民への無償診療を続けている。本書は、そこでのボランティア活動に赴任した7人の女性たちによるエッセー集である。

筆者らは、数年の派遣期間をリレーのように繋ぎながら、クリニックと自分自身の成長を語っている。同一のテーマやシーンが重なり合うところもあり、話が複眼的になって面白い。たとえば、デング熱に倒れた第3代派遣員とそれを助けようとする第4代派遣員。病気を治療するばかりでなく、患者を支えるケアの重要性に気付いた第5代派遣員の想いを受け止め、クリニックに看護研修を定着させていく第6代、第7代派遣員。

読み終えて気付くが、これは単なる活動報告の寄せ書きではない。かなり時間をかけて練り上げた「ノンフィクション作品」となっている。何しろ読みやすい。それは彼女たち自身が、国際ボランティアとしての活動を通じて、言いたいことを言うのではなく、伝えるべきことを伝えることの大切さに気付いたからに違いない。

皮下膿瘍のドレナージ、陰茎再建術など、医療者らしいリアリティーのある描写は、極限状況における医療ドラマのようでもある。しかし、筆者らは、限られた医療資源と困難に満ちた患者背景から、次第に、病院とは何か、患者とは誰か、さらには病気とは何か、生きるとは何か、支え合うとは何かについて深く考えるようになっていく。

そして、デング熱を予防するために学校教育や地域活動へと踏み込んだり、クリニック再構築のために大使館や国際財団と交渉して資金確保に奮闘したり…。もはや医療ドラマを超越して、筆者らの活躍はダイナミックに展開していく。

この本を、ぜひ多くの若者たちに読んでほしい。人生を切り開く勇気を！

そして、そんな若者を支える大人たちにも読んでほしい。なぜなら、本書で自由闊達に活躍する「国境の医療者」たちの後ろには、間違いなく彼らの情熱を温かく見守り支え、とりあえず自由にやらせてみる―そんな理想の大人たちの存在が透けて見えるからである。

（高山義浩・県立中部病院感染症内科・地域ケア科医長）

新泉社・2052円
／メータオ・クリニック支援の会　タイ北西部にあるビルマ難民診療所「メータオ・クリニック」を支援するために創設された国際NGO

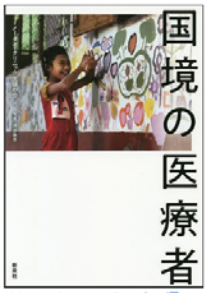
◎　「Yahoo!ニュース　本屋大賞 2019 年ノンフィクション本大賞」で、いとうせいこうさんが「おすすめノンフィクション本」として紹介してくださいました。

開催概要　ノミネート作品　ノンフィクション本大賞とは　特集記事

いとうせいこう

作家/クリエーター

1961年生まれ、東京都出身。1988年に小説『ノーライフ・キング』でデビュー。1999年、『ボタニカル・ライフ』で第15回講談社エッセイ賞受賞、『想像ラジオ』で第35回野間文芸新人賞受賞。近著に『鼻に挟み撃ち』『我々の恋愛』『どんぶらこ』『「国境なき医師団」を見に行く』『小説禁止令に賛同する』『今夜、笑いの数を数えましょう』などがある。



Yahoo!ショッピングで探す

国境の医療者

メータオ・クリニック支援の会(編集) 渋谷 敦志(写真)／新泉社

タイとミャンマーの国境の町メーテオ。そのタイ側に開かれた医院での十年にわたる国際ボランティアの詳細を、実際に日本から出かけて勤めた看護師、医師たちが各々手分けして書くというスタイル。これが実に多彩で、しかも当然リアリティに満ちていて単純に読み物としても優れていると思う。また、私も『国境なき医師団を見に行く』の著者として、こうした国際ボランティアの行動を深く尊敬し、応援する。

いとうせいこうさんのおすすめをシェアする

いとうせいこうさんには、5 月 18 日の「朝日新聞」にも書評を書いていただきました。

朝日新聞　第3種郵便物認可

弱い命を救う 医は今も仁術

すべては救済のために デニ・ムクウェゲ自伝
デニ・ムクウェゲ、ベッティル・オーケルンド〈著〉　加藤かおり訳　あすなろ書房　1728円

国境の医療者
NPO法人メータオ・クリニック支援の会〈編〉　渋谷 敦志〈写真〉　新泉社　2052円

Denis Mukwege医師 Berthild Akerlundジャーナリスト▽支援の会08年に日本で設立、しぶや・あつし写真家。

今回取り上げるのは、二組の医療行為者に関する本であり、まずひとつがノーベル平和賞を受賞したばかりのコンゴ人医師デニ・ムクウェゲの自伝的な一冊。

彼がコンゴ内紛の中でいかに暴力と対峙し、命を狙われながらすべての患者に開かれた医療を提供し続けてきたか、そして現在も性暴力がいかにあくどく住民を蹂躙し、家族を引き裂いてしまうかの克明な記録は読んでいて胸が痛い。と同時に不屈の医師デニ・ムクウェゲがいてくれることの輝きは、悲惨な状況の中で一点まぶしい。

そして日本の私たちがいつでも世界情勢に暗いことを、この本で詳述されるコンゴの歴史が教えてくれるだろう。知ることはそれだけでも力である。

さて、もうひとつの本はミャンマーとの国境にあるタイのメソットで30年、難民や移民に無償で医療を提供し続けている「メータオ・クリニック」の記録。

この支援の会には数多くの日本人医師や看護師が参加しており、ユニークなことに本書は彼女らが自分の滞在した年代ごとに書き記す、それぞれ質の高いエッセイで構成されている。

主にミャンマーからタイ側に移動してくる患者たちに、資金も乏しい中でどうよりよい医療を施すか。そこにボランティアたちのシンシア院長への尊敬、また患者と看護師の互いの尊敬が力となって作動するありさまには、読んでいて強く心が動かされる。

これを評している私自身、数年「国境なき医師団」を世界各地で取材して本にもしているのだが、海外には確実に「メータオ・クリニック」の人々やムクウェゲ医師のような医療従事者が存在し、困難の中で人道支援を行っている。

日本国内でそれを「偽善」のように扱うことがあるのは、世界側から見ると不毛な錯誤に過ぎない。彼らなしでは実際に多くの弱い命が消えてしまうのだ。

世界において、医は今も仁術なのである。

評・いとうせいこう　作家

国内から

【東京＝菊池 識乃】

＜この 1 年の思い出　カンボジア～日本(臨床・国際医療協力)＞

こんにちは。いつもご支援有難うございます。メータオ・クリニック支援の会の菊池と申します。今回で会報記事を書かせていただくのは、4 回目になるようです。2012 年の夏にメータオ・クリニック行かせていただいたのが始まりで、早いもので 7 年経っていました。毎回、その時々の想いのようなものを書かせていただいているので、今回もこの 1 年ぐらいの出来事に沿って想いを少しお話させて頂けたらと思います。
では、まず 1 年前から・・・
昨年の夏まで、2 年間ボランティアとしてカンボジアにいました。前回記事を書かせていただいたのが、滞在期間のちょうど中間頃でした。私がいたのは、プノンペンから車で 2 時間ほどの所にあるタケオ州という所で、自然豊かで長閑な町でした。病院での活動では、これまでその病院において継続的・計画的に何かを実施・運営していくということをしていなかった(できていなかった)ので、委員会で毎月チェックラウンドや会議をしたり、コースを組んで研修をしたりする中で、継続するのは難しいかなぁと思う時も何度かありました。しかし、毎回参加して一生懸命実施しているスタッフがいたり、時間外でも研修のグループワークのために集まって話し合っている様子を見かけたりすることで、彼らから常にパワーをもらい、私も諦めずに継続できました。日本のように何もかもが決められている中で勤務しているわけではないので、いろいろと現場で決められるということもあります。私の配属先病院スタッフと日本での勤務先のスタッフを見る限りですが、カンボジア人の方がアイデアもあり、自分たちで病棟・病院を変えないといけないという意識は強い人が多いように思いました。それが、私の中で引っ掛かった部分でもあるのですが。日本の病院で、看護職がどうやったらのびのびとやりがいを持って勤務できるのか。
また、私の周りにいたカンボジア人たちは、優しくてあたたかくて、ちょっとシャイな人が多く、自宅で作った果物や料理があると届けてくれたり、遊びに連れて行ってくれたり、私の下手なクメール語(カンボジアの公用語)にも付き合ってくれたり…考えているだけで、すぐにでも会いに帰りたくなってしまいます。まぁ、だいたいのお誘いやお届けが突然なのは、ご愛嬌と思っています。家でボーっとしていると突然電話がかかってきて、「門まで出てきて！」と言われ、行ってみると大量のマンゴーを渡され、そのままバイクで帰って行く…てな具合です。ホント、あっという間の出来事(笑)
そして、任期を終えて帰国して・・・
約 1 年、一般病棟で看護師として働きました。活動の中で日本の臨床現場に対して抱いていた、いくつかの引っ掛かりと、まだカンボジアで活動していたかったという想いとともに。臨床現場での看護の楽しさを再認識するとともに、やはり今はここで頑張りたいんじゃないんだよなぁという結論にも近い想いは、私の心の中の葛藤になり、苦しくなっていた頃、国際保健医療分野に直接関われる職場での仕事の話を頂きました。今は、新人に戻り、一から勉強し直しています。

迷いや悩みがないと言ったら嘘になりますが、自分がやりたいと思うことを仕事としてできるチャンスを頂けたので、またどこかで活動できる日を楽しみに、今は一つ一つ身に着けていくしかないと思っています。
この 1 年間、住む場所も働く場所も大きな移動があり、変化の大きい充実した時間でした。その場・その時に感じた想いを大切に、与えられた場所で、最大限のパフォーマンスを発揮できるようになりたいと強く思う、今日この頃です。夢を抱き続けて、前進していきたいと思います。
暑い日々が続いておりますので、皆様におかれましても、お身体お自愛ください。また何かの際にお会いできますことを楽しみにしております。

プノン・チソー(タケオ州にある遺跡)

国際保健医療協力のなかで（42）

【東京＝小林 潤】

200 年まえの世界の平均寿命は約 40 歳であった。産業革命、IT 革命をへて、人生 100 年時代に突入するといわれている。これは日本等の高所得国だけではなく、アフリカの低所得国においてもすでに 50 歳を超えており、今後も世界中で人々は長生きになると考えられている。

人が長く生きられるようになったということは、生きるか死ぬかの戦いから、いかに人生を幸福に生きるかというところに世界中が着目することになっている。これは移民・難民においても例外ではない。生きるか死ぬかの戦いがある一方、長く生きることも可能になってきている。事実、メータオクリニックで看護の導入が必要と認識されてきたのは、これも一つ原因になっていると考えている。

日本において、看護は「病気や怪我などの治療や療養のサポート」がメインで看護師や保健師などの医療の専門の資格を持ったもののサービスを示す。また、介護は「日常生活を安全かつ快

JAPAN ASSOCIATION FOR MAE TAO CLINIC

適に営むためのサポート」がメインで、介護福祉士やヘルパーなどの福祉の専門の資格を持ったもののサービスを示す。しかし世界ではまだ、介護というものが看護から独立はしていないほうが一般的である。

メータオクリニックで必要とされていることは、看護であり、さらに患者さんの生活をみていく介護でもある。メータオクリニックを退院したあと、国境をわたりミャンマーにもどるもの、タイの国境の町で暮らしていくもの、バンコクに出稼ぎにいくもの、その生活はいやでもみないではいられないのが現実であろう。

介護の視野をもった、看護師や医師の派遣はやはり必要と思っている。

編集後記

私が暮らすミャンマーでは、豪雨による洪水や地滑りで多くの死傷者や避難者が出ています。しかし、被災地出身のミャンマー人に「実家は大丈夫？」と深刻な顔で聞くと、彼は「そんなの毎年のことだよ！洪水で足止めになった人たちが町に滞在してくれるおかげで経済的に潤うし、学校は休みになるし、意外とハッピーだよ」と笑顔で答えてくれました。最近 NHK で紹介されていた戦時中の日本のエピソードの中には、軍需工場で働く女学生が機械油を布に浸み込ませてこっそり家に持ち帰り、ホットケーキを焼いて家族で食べた、という話がありました。どんな時代・どんな状況でも、現実の中にスキマを見つけて楽しむ、人々のたくましさを感じました。(西尾)

次号の予定

次号は、10 月中～下旬ごろ配信の予定です。
現地からの最新情報は、インスタ、ツイッター、ホームページでも、随時更新していきますので　ぜひ、お時間があるときにご覧ください。

メータオ・クリニック支援の会(JAM)の活動を支援して下さり、心より御礼を申し上げます。JAM の活動は皆さまからの温かい寄付によって支えられ、院内感染予防活動、移民学校での啓発活動など様々なプロジェクト・設備投資を実施しています。
支援の輪が広がっていけるよう、どうぞ当会の Facebook もフォローして「いいね」や「リツイート」で応援してください。

当会では、都度の支援金の受け入れとともに、「1 日 10 円からの支援」を基本とし、継続的なご支援をお願いする賛助会員制度を用意しております。
【一般会員】3,650 円/年　　【学生会員】1,825 円/年　　【法人会員】36,500 円/年
当会ホームページにアクセスしていただき、お申し込みフォームから会員登録のうえ、指定の口座へのお振込をしていただきますと、賛助会員として登録させていただきます。詳しくは当会ホ

ームページをご覧ください。

◇◆◇

ＮＰＯ法人メータオ・クリニック支援の会　**Japan Association for Mae Tao Clinic（JAM）**

日本事務局宛て **E** メール	support@japanmaetao.org
JAM ウェブサイト	www.japanmaetao.org
Facebook	Japan Association for Mae Tao Clinic (JAM)　で検索して下さい。 https://www.facebook.com/JapanAssociationforMaeTaoClinic/
Instagram	https://www.instagram.com/japan_association_maetaoclinic/
Twitter	https://twitter.com/japanmaetao

※掲載されている全ての内容、文章の無断転載を禁止します。